

浄土

monthly
JŌDO

Jun 2007

6



念佛はわが所作なり。往生は佛の所作なり。

往生は佛のおん力にてせしめ給うものを、

わが心にかくせんと思うは自力なり。

たゞすべからく称名につきたるの

来迎を待つべし。

浄土

2007/6月号 目次

巻頭特別インタビュー

法然を演じる	中村梅之助	2
蓮台の半座を空けて待つ	古井戸秀夫	13
表紙の言葉	桜井良夫	19
江戸を歩く 第七回	森 清鑑	20
響流十方	袖山榮輝	28
会いたい人 山田太一さん①	関 容子	30
仏教コラム	大室了皓	42
総会告知		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記		48
表3 教えと法話	生野善應	



表紙題字=前浄土門主 中村康隆猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

法然へ

を演じる

中村梅之助さん

に聞く



中村梅之助

法然上人の生涯と思想
中村梅之助さんによる講演会
2023年11月18日開催

四年後の平成二十三（2011）年という年は、浄土宗では法然上人八百年大遠忌、浄土真宗では親鸞聖人七百五十回御遠忌にあたるということで、このところ、浄土宗、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派の三宗派では、お待ち受けの事業等が活発に行われている。

その盛り上がりのなか、前進座は『法然と親鸞（田島栄二作 橋本英治二演出）』と題する大作の特別公演上演を決定、今夏七月の京都南座を皮切に平成二十二年まで全国各地で計三百回の上演を行うと発表した。

かつて、前進座『法然』劇において、法然上人を熱演し大喝采を浴び、このたびもまた上人を演じることとなった、前進座、中村梅之助丈にお話をうかがうことができた。

□昭和の初年、さまざまな分野で革新的な運動が起りました。前進座は昭和六年の創立です。それには遅れるのですが、私どもの雑誌『浄土』も仏教ルネッサンスといったことを標榜して昭和十年、創刊されました。元気のいい時代だったと思います。

ところで、梅之助さんが法然上人を演じられたのは「お誕生八百五十年」の頃でしたから、昭和五十七年ということになりますか。

そうです。私が五十二歳のときでした。一九八一年から八二年にかけてでしたね。八二年は、前進座創立者のひとりでもあった父、翫右衛門が亡くなった年でして、亡くなったちようどその日一日だけお芝居が無かった。読売ホールの休館の日だったのです。ですからきちんと看取ることができました。ただ夜はNHK大河の「峠の群像」での近松門左衛門役があつて、仕事に行つた記憶があります。いろいろな意味で、『法然』の公演は私に

とって忘れられないものです。

□劇にするにあたって、当時、問題はなかったのですか。

法然上人という御方は、小説にするのもなかなか難しい、ドラマにするのも難しいところがあると言われてきた御上人なのですね。それを舞台にしてみましたので、それは冒険でした。しかし、結果からいうと、それを舞台で二〇四回公演したのです。二十三万人のお客さまが観てくださったのです。

はじめてお話を承ったときには、これはエライことになったと思いましたね。前進座の舞台はともかくとして、世間ではテレビの「遠山の金さん」や「伝七捕物帳」の人だと思われていたわけですから。そういう役者がどうして法然上人を演ずることができるのだ、と言われても仕方ないのですよ。私も悩みました。

□しかし、NHK大河ドラマの「花神」の主演、村田蔵六、つまり大村益次郎の当たり役があったのでは。

蔵六は一年間一緒に成長していく役(笑)。あの役にぶつかったことは幸せでした。法然上人の役は別種に難しいことだと思いました。それで増上寺の、当時は、中村御前、中村康隆御法主ですね。お会いしたときに励ましていただいたのです。それから知恩院の、当時は藤井実応猊下。お会いいたしました。それで申し上げました。とてもこの役は私には



昭和57年の舞台

難しい。しかし、お話を受けた以上、引き受けた以上、なんとしてでも頑張ろうと思います、と。法然上人の御衣の裾にでも少しでも近づきたいというようなつもりで、なんとか頑張ってみたいと思います、と申し上げましたらね、藤井猥下はこうおっしゃった。それは私にとっても同じことなのですよ。私だってとてもとても法然上人になることはできないのです。しかし、どれだけ近づくことができるだろうか、ということでは毎日毎日努力しているのですよ、いま、あなたも私もまったく同じ場所にいるのです、とこうおっしゃったのです。

□感動的なお話ですね。いかにも藤井先生らしいおっしゃりようです。よいエピソードを聞かせていただきました。なるほど誰にとっても法然上人への距離はあまりにも遠いということなのですね。

それを聞いてある確信のようなものを得ました。たとえば法然上人は一日七万回の念仏を申された、といえますね。人と話しているときもあるでしょうし、食事をとっているときもあるでしょう。それでも七万回。けれど、法然上人の絵を拝見いたしますとね、いつもこうやって数珠を手にとっていらっしゃる。数珠を繰っていらっしゃるように見えます。それで私は数珠で数え方を工夫したのです。房を目印にしましてね。何処までいったか、次は何処からはじまるか計算しましてね、房の動きで各場面ごとに自分でお念仏の数がわかるようにしたのです。

□二〇四回の公演があつて、それぞれ各場面があつて、舞台の上だけでも、ずいぶんお念仏をお称えになったのでしようね。きつと凄い数になっているでしようね。

百二十万八千八十八回です(笑)。数珠繰りで腱鞘炎になりましたよ(笑)。

□お数珠が少しおおぶりに作つてあるのですね。

そうです。そのお数珠を、つまり二〇四回の舞台で私が使つたお数珠を誕生寺さまに御奉納しようということになりましたね。藤井猷下がご自分でその謂れを色紙に書いてくださつて、ですからどこか宝物殿にでもしまつておくのかと思つておりましたら、本堂の入り口に置かれましてね。梅之助の使つた数珠ということで、御参詣の皆さんにすぐ分かるようにしてくださつた。私の写真も飾ってくださいましてね。

□応援ということなのでしよう。できるだけ沢山の人に身近に見せてあげたいというお考えだったのでしょうか。

応援といえね、私が法然上人を演ずるといふことは、大方の見方ではちよつと無理ではないか、さつきお話ししましたように、遠山の金さんとか伝七とかのイメージがありましたから、どうかな出来るのかなあ、と思われた方が多いのですが。そのなかで最後まで「大丈夫、出来る。やろう」とおっしゃつてくださったのは大田秀三上人でした。もう一



人小口先生とおっしゃる、諏訪のお上人とお二人が最後まで推してくださった。大田先生は舞台稽古を見にいらっしゃってね。稽古場が掘っ立て小屋みたいところで、まあ倉庫みたいな中に作ってやっていたのですが、稽古を見終わって、大田先生、何と言ったと思います。「ああ、法難に遭わないで済んだ（笑）」そうおっしゃって、涙を流されましたね。そこでまた強く確信を持ったのです。

□当時、観客は、まるで本当の法然上人を見ているようだと涙を流して、梅之助さんを押込んで合掌したと聞きます。私はその舞台のビデオを押見したことがあるのですが、大原問答のシーンでは、あまりの力強さ、立派さに思わず胸が熱くなりました。まず七月の京都公演、そして八月九月の東京公演、いずれも大好評でした。

それから大阪、名古屋、いろいろ地方巡業、各地を回ったのです。そして最後の最後、二〇四回目の公演を終えまして地方から帰って参りましたらね、なんと駅のフォームに大田秀三先生と高橋良和先生が、立ってお出迎えしてくださいましてね。「長いこと、ご苦労さまでした、おつかれさまでした」とおっしゃって。あれは嬉しかったですね。

静岡で公演しましたときに、中村康隆御法主が、私だけのために食事会の席を作ってくださいましたのも、よい思い出です。

□清水の実相寺から出られた御方ですからね。



昭和57年の舞台



そうです。御店に請われて二人で一枚の色紙に書くといったようなことになりましたね。大僧正と一緒になんて、冗談じゃない、畏れ多いと、そこで別々に書くことになった。そしたら中村御法主がちょっと見せてくれ、とおっしゃる。そのとき私は「泥池に蓮の花あり」と書いたのですが、仕方なくその色紙を見せたのです。そうしたら「ううむ、これだけのものを書くには十年はかかるな」とおっしゃって。「私にもくれないか」と。「私も差し上げるから」とおっしゃるのです。そのときは、とんでもない、畏れ多いと辞退したのですが、自宅に中村先生はすぐにご自分の書を額にして送って来られてしまつて（笑）、仕方なく一時間半、墨を摺りまして、四時間かけて十枚くらい書いて、書をたしなむ家内に見せたら「しょうがないわねえ、じゃ、これにしたら」（笑）一枚選んでもらつて、まあこれでいいだろうみたいを送つたのです。ずっと後で鎌倉の大仏様にお嫁に来られたご息女にお会いしたとき「ああ、あれ書いたのはあなたでしたか、父の自室に大事そうに飾ってありましたよ」とおっしゃつておられました。ああ、えらいことだ、有難いことだと思ひましたよ。

□この度、もう一度、法然上人を演ずるわけですが。

ずっと後に中村猥下にお会いしようと思院に行つたときは、入院なさつておられて、実は病院も主治医も私と同じ先生だったので、御見舞いすることが出来ました。いや実に不思議なことでした。二〇〇六年のお正月に知恩院に参りましたら、車椅子で廊下に出て来られましたね。ご挨拶すると「どうぞ、宜しく願ひします」とおっしゃつた

のです。どういうことか、聞きなおすと「もう一度、法然上人を演れ」とおっしゃっているのです。これは何度もおっしゃったのです。しかし、私はもう七十七歳です。前のときは五十二歳。さて、いったいどういうことになりますか。

しかし、このたび上演が決定になった。中村御前には今回の上演が決定したことを、まだ正式にご報告していないのです。先日知恩院にはご報告いたしました……ああ、お会いしたいなあ。

□中村御前との経緯も含めて、浄土宗とはずいぶん深い御縁で結ばれていますね。さて今回の『法然と親鸞』、見所というところという場面になるでしょう。

黒谷の時代から私の演ずる法然上人になります。今度の劇は法然と親鸞、主人公が二人になるため、どうしても時間の制約があります。削らなければならないところもありましたが、大原談義の場面、熊谷蓮生房入門の場面、土佐遠流を毅然として受け入れる場面など、見せ場はたくさんありますよ。

□思えば法然上人の土佐遠流は上人七十五歳のときでした。泣いて止める弟子達に向かって「むしろ地方に念仏を弘めることは、かつてからの願いであった」と莞爾として赴かれたのでした。そのことすら重なって来るお話ですね。期待しています。長丁場、巡業。くれぐれもお体にお気をつけて、私たちの目に、法然上人の像を焼き付けてくださるよう、お願いいたします。本日は長時間にわたって、まことに有難うございました。(了)



吉祥寺前進座にて。聞き手・佐山哲郎

雛鳥とお二輪

この世からあの世を夢見る
少女たち

古井戸秀夫

蓮台の
半座を空けて
待つ

歌舞伎には、この世からあの世、すなわち現世から来世を夢見て死んでゆく女性たちがいます。『妹背山婦女庭訓』^{いもせやまおんなていきん}「吉野川」の雛鳥、「御殿」のお三輪、二人の少女たちも来世を夢見ながら死んでいきました。

雛鳥は、日本のジュリエットに譬えられます。年齢は「二八」^{にち}と呼ばれる十六歳。現在の満年齢でいうと十四、五歳の春、名前に因む雛の節句の夜に首を斬られて死にました。シェイクスピアのジュリエットは、十三歳。二週間後、八月一日の収穫祭に満十四歳の誕生日を迎えることになっていた少女です。

ロミオとジュリエットの悲劇は、イタリアのヴェローナの名門貴族モンタギュー家とキャピレット家の確執から生まれました。雛鳥と久我之助^{こがのすけ}の悲劇も、紀伊の国（和歌山）の大判事家と大和の国（奈良）の太宰の少弐家の対立が原因でした。

大和の国吉野山の麓から流れる吉野川は、紀伊の国に入り紀ノ川と合流します。吉野川

が紀ノ川に流れ落ちる、そのところに妹背山はありました。背山は兄山^{せやま}とも書く男山です。女山の妹山と吉野川の急流を挟んで並んでいました。大化の改新で背山が畿内に編入され、妹背の山は紀伊の国と大和の国に別れてしまいました。歌舞伎の『妹背山婦女庭訓』は、大化の改新の古代ロマンに題材を取った作品でした。

久我之助の父は、紀伊の国の領主大判事清澄です。大判事という職制は、大化の改新のち大宝律令によって定められました。雛鳥の亡き父、太宰の少弐の職責も同じ律令によって生まれたものでした。大判事は裁判を司る刑部省の長官です。しかし、九州の太宰府にも大判事が置かれ、その副長官が太宰の少弐でした。奈良の都と九州の太宰府、二つに分かれて設置された閣僚の確執が背景にはあったのでしょうか。吉野川を挟んで紀伊の国と大和の国、隣同士に領地を持つ大判事家と太宰の少弐家は領地の境目を巡り激しく対立

する家だったのです。

ロミオがジュリエットを見初めたのは、仇敵キャピレット家で開かれた仮面舞踏会でした。憧れの人、ロザラインにひと目逢いたくて、ロミオは危険を顧みずに敵の家に潜入します。そこで出逢ったのが、ジュリエットでした。その美しさに心を奪われたロミオは、ジュリエットに忍び寄り、手に接吻を求めました。洒落た会話の応答のなかで、すばやくロミオはジュリエットの唇に接吻をしました。その直後、ロミオはジュリエットがキャピレット家の娘だと聞き、ジュリエットはロミオが仇敵モンタギュー家のひとり息子だということを知ります。ジュリエットは、初めての恋の喜びと、皮肉な運命を嘆きます。

私のただひとつの恋が、ただひとつの憎しみから生まれたなんて！

知らずに会ったのが早すぎて、知ったと

きにはもう手遅れ！

産声をあげた時から不吉な恋

忌まわしい敵を愛するしかないのだから。

（松岡和子訳・ちくま学芸文庫「シェイクスピア全集」2）

雛鳥と久我之助の出逢いも、束の間の恋でした。奈良の春日山の小松原で時雨の雨の晴れ間に二人は出逢いました。見初めたのは、雛鳥のほうでした。侍女の機転で久我之助の持っている小鳥狩りの吹矢筒を借り、雛鳥は久我之助の耳元で囁きました。久我之助も吹矢の筒先を雛鳥の耳に当てて囁きます。囁き竹を通して二人は寄り添い、すぐに「口と口とを鴛鴦のひったり抱き付」く仲になってしまいました。その直後に、雛鳥と久我之助は敵同士の娘と息子であることを知りました。

「吉野川」の場面は、それから数ヵ月後、弥生の節句の日になります。久我之助にひと目逢いたいと思う雛鳥は、母の定高に願い吉野

川の下館に仮座敷を設えて出養生に来ました。吉野川の向こう側に久我之助の姿を見つけると、春風に振袖を靡かせながら川辺へと降りていきました。認めてきた恋文に小石を添えて吉野川に投げ入れると、その音に気が付いて久我之助も川端に降りてきました。吉野川を挟んで再会した雛鳥は、「久我さまか」と呼び掛け、久我之助は「雛鳥、ぶじで」と答えます。バルコニーのジュリエットが、「ああ、ロミオ、ロミオ」と恋人の名前を呼ぶように、雛鳥も久我之助も互いの名前を呼び合うのでした。

蘇我入鹿大臣に入内せよと迫られた雛鳥は、久我之助に操を立てて死ぬことを許されました。吉野川の向こう側では、久我之助が忠義のために切腹をしています。雛鳥も久我之助も相手の無事を願いつつ、自分ひとり死のうと決意をしていたのです。雛鳥を安心させるために、吉野川に桜の枝が流されました。この桜は、久我之助の命が助かるしるしの枝

でした。雛鳥は喜びながらも、未来の再会を夢見ながら死んでいきます。

雛鳥の最後の言葉は、「千年も万年も、ご無事で長生きあそばして、未来で添うてくださいませ」というものでした。この世、すなわち現世では長生きをしてください。ただし、あの世では仲睦まじく夫婦になってくださいませ、という願いでした。

潔く散ってゆく雛鳥の背景には、夫婦は二世の契りだとする江戸の庶民の信仰がありました。「親子は一世、夫婦は二世、主従は三世」ともいいます。見ず知らずの男と女が夫婦になるということは、深い因縁があったからであろう。それゆえ、現世であるこの世だけの関係ではなく、来世にまでつながる深い縁があるのだらうという考え方になりました。

幼くして死んだロミオとジュリエット。二人の死骸を見て、モンタギューとキャピュレットは和解をしました。モンタギューは、夫

ロミオに忠実貞節であったジュリエットを称えて純金の像を建てたいと言いました。キャピュレットも、ロミオの像を建てたいと申し出ました。おなじように息子と娘を失った大判事と定高も和解をします。定高は、雛鳥の死体を雛祭の雛の道具とともに川向こうへと嫁入りをさせます。琴の音色とともに、吉野川の水がくるくると流れ始める「滝車」という大道具の仕掛け物を使った華やかな場面。雛人形の長持や小袖箆笄とともに流される雛鳥の死体は、婚礼の輿入れの行列であるとともに、死体を川に流す水葬礼でもありました。

明治時代までの歌舞伎では、雛人形の内裏雛の顔を雛鳥に扮する役者の似顔で作る演出があったそうです。雛人形の首がころりと落ち、母の定高が拾って見ると娘の顔にそのままの首があります。この人形の首のように、娘の首を斬って操を守らせてあげようという母の決意を見せるところです。近代の名女形、六代目尾上梅幸は定高に扮して転げ落ちた雛

人形の首をみると、その首が自分の似顔絵になっていたという経験を語り伝えています。雛鳥を演じた若き日の記念の小道具に舞台上で再会したのです。雛鳥の最後には、琴の調べと満開の桜に象徴される、幻想的でロマンチックな雰囲気満ち溢れています。

ロミオとジュリエットは、生きているうちに自分たちの意思で秘密の結婚式を挙げました。ロミオがヴェローナを追放されて、「でも処女の私は、処女のまま未亡人として死ぬんだわ」と嘆いたジュリエットも、その日の夜にはロミオと契りを交わしています。この世の最後でも、ロミオは仮死状態のジュリエットの唇に口付けをしながら自害しました。ジュリエットもロミオの死体に覆いかぶさるようにして死んでいきました。

東の間とはいえ、この世で結ばれたロミオとジュリエットに対して、久我之助と雛鳥は離れ離れのままで死んでいきます。吉野川の急流に隔てられながら、互いの無事を祈りつ

つ純潔のまままでこの世を去った雛鳥の夢見たものは来世での契りでした。極楽浄土に生まれ変わることが出来たならば、おなじ蓮はすの葉の上で夫婦になって暮らしたい。「蓮台の半座を空けて待っている」というフレーズは、この世では結ばれることの難しい男と女に共通する願いでした。未来での契りを果たすために、たとえ命を失っても、この世での純潔を守り通さなければならなかったのです。

『妹背山婦女庭訓』には、もうひとり若い娘の恋が描かれています。奈良の杉酒屋の娘お三輪。まだ寺子屋に通う、振袖姿の若い娘でした。鮮やかな萌黄色の縮緬地の振袖には、裾に子供たちの遊戯道具「十六武蔵」の模様が描かれています。この若い娘が、藤原鎌足の御曹司淡海公の忍び姿だとも知らず、烏帽子折の求女という青年とこの世の契りを交わしました。逆臣蘇我入鹿を滅ぼすために、入鹿の妹橘姫に接近しようとする烏帽子折の求女。お三輪は寺子屋のお師匠さまに教えても

らった乞巧こうこうてん奠の願いのことを思い出しました。七夕の夜、男には白い糸、女には赤い糸、苧環に針を付けて結ぶと、その男と女は結ばれるという俗信でした。「恋わたる思いは千々に結ばれて、いく夜ねがいの恋の苧環」という歌とともに、求女と七夕の恋を誓いました。

しかし、求女は橘姫の裾に苧環の赤い糸を付けて追っていきます。裏切られたお三輪は、求女の裾に苧環の白い糸を付けて求女の跡を追いかけて、蘇我入鹿の御殿に迷い込んでしまいました。嫉妬に狂ったお三輪は、疑着の相と呼ばれる恐ろしい形相になります。蘇我入鹿を滅ぼすためには、疑着の相の女の生血が必要でした。お三輪は、漁師の鱈七こと金輪の五郎今国という藤原家の忠臣により刺し殺されてしまいます。今わの際に、求女こと淡海公のおためになったのだと聞かされたお三輪は、「冥加なや、もったいなや。いかなる縁で賤の女が、そうしたお方としばしでも、

お傍にいたる身の果報、あなたのおためになることなら、死んでも嬉しい、かたじけない」と言いつつも、「とは言うものの今一度、どうぞお顔が拝みたい、たとえこの世は縁薄くとも、未来は添うて給われ」と願います。お三輪は、「もう目が見えぬか、なつかしや」と苦しい息を付きながら、求女との恋の思い出の苧環を握り締め息を引き取るのでした。

この世での契りを果たしたお三輪も、純潔を守った雛鳥も、幼い娘が死に際に夢見たのは、あの世での再会でした。

『妹背山婦女庭訓』いもせやまおんなていきん

歌舞伎の「王代物」おうだいもの（古代史に取材した作品）を代表する名作。作者は近松半二。明和八年（一七七二）正月、人形浄瑠璃で初演。同年八月に歌舞伎化された。大化の改新を題材とした五段続きの長編戯曲で、三段目の「吉野川」と四段目の「御殿」は繰り返し上演される人氣狂言になっている。

歌舞伎座の「六月大歌舞伎」では、「小松原」「花渡し」「吉野川」の三幕が松本幸四郎の大判事、坂田藤十郎の定高、中村梅玉の久我之助、中村魁春の雛鳥という配役で上演されている。

新橋演舞場「五月大歌舞伎」でも、中村福助のお三輪、中村吉右衛門の鱗七の配役で「御殿」が上演されたばかりである。

古井戸 秀夫（ふるいどひでお）

東京大学大学院教授

演劇学・舞踊学専攻。主たる研究テーマは、歌舞伎の美学論、表現論、演出論、人物評伝、作品論。文献研究、歌舞伎の名作の復活、失われた表現技法の復元研究にも取り組む。舞踊詩劇『女と影』の復活上演と『歌舞伎登場人物事典』の出版を終え、鶴屋南北の評伝と未刊全集の編集に取り掛かる予定。著書に『歌舞伎―問いかけの文学』『新版舞踊手帖』、岩波ジュニア新書『歌舞伎』など。

表紙の言葉

え
桜井良夫

6月

中目黒

祐天寺

東急東横線祐天寺駅を東へ歩くとすぐ祐天寺があります。浄土宗屈指の大寺院です。開山上人は、下総大巖寺、小石川伝通院、芝増上寺の法主を歴任した高僧祐天上人。彼はこの地に常念仏堂を創建することを念願していましたが果たせず、その高弟祐海上人が実現させたのですが、祐天上人を開山とし自らは第二世となったということです。祐天上人は、五代将軍綱吉の生母、桂昌院の厚い帰依を受けたことでも有名です。八代将軍吉宗は祐天寺を特別に庇護し、浄財を喜捨。大伽藍が完成します。しかし明治二十七年の火災で堂塔伽藍の大半を焼失。往時の様式が残るのは地藏堂、鐘楼など。境内に歌舞伎で有名な「累」の塚があります。

江戸を歩く

第七回



森清鑑

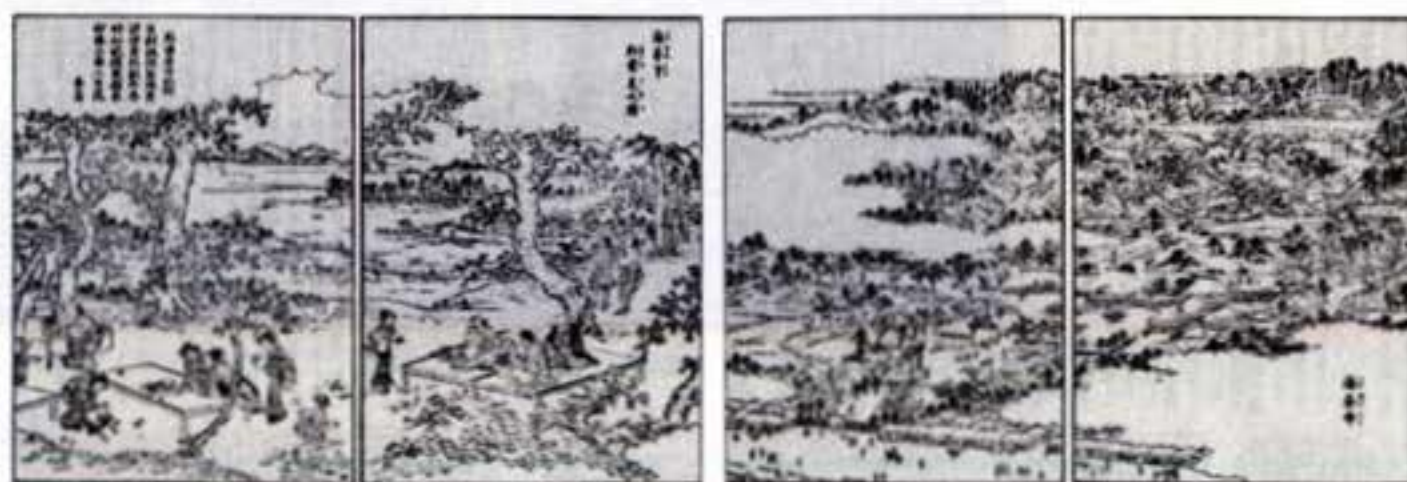
大江戸ウォーカー

海晏寺

品川寺江戸六地藏を拜み、東海道を南に歩く。隣が海雲寺、そして広大な面積を誇る、海晏寺門前町に出る。江戸期の海晏寺は、現在の敷地を南北東西ともに倍に伸ばした広さである。南北は青物横丁、今の仙台坂まで、東西は第一京浜を突き抜けて海沿いの街道までの存在。建長三年（一二五一）、鎌倉五代執権、北条時頼は、広大な土地を確保し、建長寺開祖の大覚禪師に創建を依頼。そもそもの縁起は、品川沖で捕らえられた大鯨にある。鯨の腹を割くと神々しい観音像が出現したのである。この話が鎌倉にもたらされ、信心深い時頼は動いた。かくて臨済宗海晏寺が誕生、土地名「鯨洲」由来の寺となった。時頼は質素、堅実、宗教心に厚く、御家人、民衆に対して善政を行った名君として今日も高く評価されている。時頼の息子、元寇時の執権、北条時宗も阿弥陀如来像を安置し、この寺を隆

盛に導いた。しかし、時代を経て家康が江戸入府した頃には、海晏寺は廃れていたのである。家康の再建が始まる。この時から曹洞宗の寺となった。東海道の左右に二棟、三棟幅の民家が並び、人馬が往来している。道に面して門がある。柵のような門から入り、中門を潜ると左手に弁天様がある。さらに行くと本堂、方丈が建ち並び、背後は丘陵が迫り上がり、周囲は鬱蒼とした木々に囲まれている自然風景。海沿いの民家はいましも波に洗われるかのようなだ。当然の事ながら、海晏寺から見おろす品川のは景色は、絶景であった。加えて楓がふんだんに植えられていたので、十月ともなれば紅葉の名所として江戸庶民の賑わいを見せた。庶民は、海晏寺を「紅葉の寺」と呼んだ。「あれ見やしゃんせ海晏寺、ままよたつたの高尾でも、及びないぞえ紅葉狩」。この寺の丘上には幕末、明治の元勳岩倉具視、松平春嶽、由利公正等が眠っている。松平春嶽は、徳川御三卿田安家から福井松平家

◆江戸名所図会上巻
海晏寺の光景。
門前は東海道



の養子となった。そしてすっかり疲弊した福井藩財政の立て直しに取り組む。有能な人材をどしどし起用。藩医、橋本左内、熊本から呼んだ横井小楠など。そして殖産興業の隆盛によって財政再建に成功する。春獄が採用した、そうそうたる面々はやがて国家をも動かす原動力となっていく。「五箇条のご誓文」の起草に参加した、由利公正しかり。横井小楠の殖産興業策に触発され、彼のもとに学び、経済調査を行い、藩財政の立て直しに貢献する。勝海舟は横井小楠を「底知れぬ知識と知恵の人」と讃え、深いつきあいをしている。小楠に坂本龍馬を紹介し、会わせている。神戸軍艦操練所設立の際、龍馬は春獄に掛け合い、春獄は五千両という大金を都合つけた。早くから開国論を主張。十四代將軍を選ぶときには、慶喜擁立の急先鋒で山内容堂、島津斉彬とともに動いた。ために井伊直弼の「安政の大獄」時には、まともに影響を受けた。春獄は謹慎、橋本左内は刑死。「桜田門外の

変」で直弼が暗殺されると、幕政に復帰する。そして激動の維新、徳川家の保全と政局の収拾に努めた。大変な殿様である。この松平春獄と薩摩、長州を背に倒幕、王政復古をひたすら押し進めた岩倉具視が海晏寺の丘の上で肩を並べて眠っているのも興味深い。しかし、岩倉も当初、公家の世界で公武合体を主張し、皇女和宮を十四代家茂に嫁がせる原動力となり、結果、佐幕派と見られ、尊王攘夷派志士の朝廷への圧力により、岩倉村に幽居させられた人でもある。また、江戸から明治へ、ともすれば瓦解しそうな明治新政府で岩倉の果たした役割は大きい。鉄道創設の功労者でもある。

仙台坂から立会川

海晏寺の南側塀沿いに迫り上がる坂が江戸期の仙台坂である（仙台坂トンネルがある坂）。青物横丁方面に向かう現代の仙台坂は、仙台坂とは呼ばれていない。街道沿い、海晏

寺から坂道を挟んで泊船寺がある。その西側、すなわち仙台坂を登る左手には仙台北下屋敷があった。そこで伊達家仙台坂。急峻な坂を登りきると、樹齢三百年のタブの木が一本聳えている。藩屋敷名残の^{なごり}大木である。そして同じく屋敷内にあった「仙台北味噌醸造所」(八木醸造所)。仙台坂はそのまま池上道に^{いけがみみち}続いていた。これを、大井村を突っ切つてずんずん南に進めば、左に平安時代から続く、鹿島社があり(大森貝塚公園近く)、次いで右手に山王社(日枝神社)、巨大な松の木がそびえ立つ、風光明媚な八景坂(大森駅付近)そして池上本門寺に至る。日蓮の命日、十月十三日のお会式には、毎年、太鼓を叩いて仙台坂から本門寺まで^{たいまつ}松明の火が列を成したという。池上道も古道で江戸時代にはこの道を利用する人々も多かった。

東海道に戻る。海晏寺、仙台坂を右に見る。坂を起点に南品川から大井村になる。道沿いの茅葺き民家の数もぐんと少なくなる。街道

を海辺沿いにどんどん歩くと立会川の河口に形成された浜川町。この集落は農業の傍ら海苔養殖を行う家が多かった。それもそのはず、品川海苔生産の中心地で、將軍家に上納される海苔の最高級品を生み、浅草の海苔問屋を通じて流通された浅草海苔の代表品。立会川と目黒川の吐き出す真水が混じって最高の海苔ができた。立会川に出る。架かる橋は、

◆仙台北上、樹齢300年のタブの木



「浜川橋」。橋を渡ると右手に神明社（天祖神社）の鬱蒼とした森が見える。立会川は、碑文谷弁天池（学芸大学駅近くの碑文谷公園）や清水池などの湧き水を集めた蕩々たる流れであった。川はこの浜川橋から海に流れ込む。東側、海に向かって左手の川沿いに山内土佐守の荷揚場。方向を転じて川を西に少し遡ると、立会川北側に面して土佐高知藩山内豊信（容堂）の下屋敷があった（浜川中学校、現在の第一京浜を含む立川橋から北東方向正方形の土地）。敷地約一万六千坪。立会川の引き水が邸内の中央を流れている。風光明媚なことで容堂公が愛した屋敷である。これを右手に見て少し上流に行くと川を挟んで一万八千坪の広大な薩摩藩島津家（島津斉彬）の抱え屋敷があった（立会緑道、関ヶ原公園）。つまり両藩の下屋敷は立会川沿いに仲良く並んでいたのである。明治になり、この屋敷もなくなると、山内容堂は、前述の仙台坂伊達下屋敷に隣接し、見晴らしの良い丘陵にあつ



◆立会川「浜川橋」



◆橋より東、海側。左山内家荷揚場、浜川町



◆橋より西。土佐藩下屋敷方面

た、嘗ての越前鯖江藩、間部下総守屋敷跡の一角（下総山、立会小学校、大井公園）に眠りにつくことを申し出た。間部は、井伊大老のもとで老中として安政の大獄を推し進めた人物であり、結果、自藩の下屋敷に隠居させられた容堂公が間部の下屋敷跡に墓を設けるとは皮肉な事ではある。容堂公の墓は、大井公園入口左から曲がりくねって上がったところにぼつねんとある。（墓は立会小学校創立とともに、現在地に五十メートルほど移された）藩主歴代の墓が並ぶ様とは異なり、孤高、円形状（土饅頭型）のユニークな墓である。ここを墓地にと遺言したところを見ると、公は、余程、海を見下ろす、この地が気に入っていたのであろう。品川周辺には、激変の状況によって、敵味方の関係になったが幕末を動かした人物が一緒に眠っているのである。

山内豊信（容堂）は、嘉永元年（一八四八）に高知土佐藩十五代藩主に就任した。十四代藩主が嗣子のないまま急死。その死を隠して隠居と成し、分家の豊信と養子縁組み、藩の存続に成功した。これには十四代夫人が薩摩藩島津斉彬の妹であり、彼の裏工作もあったという。ともかく、徳川家は事実を知っているにもかかわらず黙認。山内家は初代一豊以来の徳川の信任を得たのである。それまで予想もせず、突如藩主となった容堂は明晰な頭脳の持ち主。世の急激な変転を感じ、藩の改革に乗り出す。吉田東洋を起用。公武合体を理念とする。朝廷と徳川の協調一致体勢論。中央にあつては、松平春嶽、島津斉彬らとともに十五代將軍徳川慶喜擁立に動く。しかし、時代の荒波は、下士士族による革命が起きる。尊皇攘夷、倒幕運動を生む。土佐藩にあつてその急先鋒、武知半平太の土佐勤王党を壊滅させる。大政奉還を勧める坂本龍馬の船中八策は、容堂にとっては政権を朝廷に返し、徳川の発言力も維持するという、薩長の倒幕理由を失わせる一石二鳥の策に思えた。龍馬の発案とも知らず、これを携えて上申した吉田

東洋門下生の後藤象二郎の具申をもとに大政奉還を慶喜に建白。大政奉還なる。だが、時代の波は薩長の天下となる明治新政府誕生に向かつて進む。容堂は小御所会議にて徳川氏を中心とする列侯会議による政府を主張し、薩長派の岩倉具視と激論になる。慶応四年の戊辰戦争でも土佐藩の出兵を抑えようとしたが、土佐藩指揮官の板垣退助は意に背いて出兵する。また、井伊直弼の安政の大獄では、幕議に逆らったとして品川鯨洲下屋敷に蟄居させられている。とにかくこの時代の人間関係の複雑さは半端ではない。結果から見れば、それもこれも新時代の幕を開けようとする人々の葛藤から生じている。龍馬の脱藩は、勝海舟の取りなしによって容堂はこれを許した。明治になって、木戸孝允から龍馬の真実を知らされ、慨嘆したという。晩年は「鯨海酔侯」(鯨のいる海の酔っぱらいの殿様)と自らを称し、酒と詩作に明け暮れた。浅草で放蕩三昧の生活を送る。詩才は相当なもので、



◆山内容堂墓(大井公園)



◆涙橋看板

激動の世にあつて決定打を打ち出し得なかつた哀感がさりげなく出ている。明治五年逝去。

鈴ヶ森

再び立会川に架かる東海道「浜川橋」に戻ろう。江戸市中引き回しの罪人は、この橋のたもとで、集まった大勢の民衆の間にひそかに交じる親類・縁者と最後の別れを告げる。この世とあの世への別れの間でもある。これから先には鈴ヶ森の刑場が待っている。誰がつけたか汨橋。

罪人は全くの海沿いを走る街道をひかれて行く。松林。鈴ヶ森獄門場である。街道に面して間口四十間、奥行き九間の細長い区画。往来人の多い街道に見せしめのために処刑場が設置されたのが慶安四年（一六五二）。直径四十センチメートルほどの丸石盤の中央には鉄柱立ての円穴。これは火煎に使われた。柱の下に木を堆く積み、罪人はその上にくりつけられる。火は天をも焦がす。八百屋お

七もこうして処刑された。もう一つ残っている石盤は四十センチメートル角。中央に角穴。木柱に高く、くくりつけられた罪人は下から槍で突かれる。断首された首洗いの井戸もある。明治の御世まで横柱の上に獄門首が並んだ。江戸期、ここを通るのが嫌で池上道を迂回して歩く旅人も多くいたという。明治維新までに処刑された有名人は、丸橋忠弥、天一坊、山内伊賀亮、赤川大膳、村井長庵、白井権八、日本駄右衛門、白木屋お駒、そして八百屋お七。いずれも芝居や講談でおなじみの人達である。「南無妙法蓮華経」を刻んだ高さ三メートルにも及ぶ供養塔が立っている。池上本門寺の貫首、日凱上人が罪人の魂を弔って元禄十一年（一六九八）に建てた石塔である。歌舞伎の舞台や『江戸名所図会』にも、この石塔が描かれている。向かって右隣の大経寺は処刑人の供養のために建てられた。

お七が火あぶりの刑に処せられたのが天和三年三月二十九日（一六八三）。年僅か十六

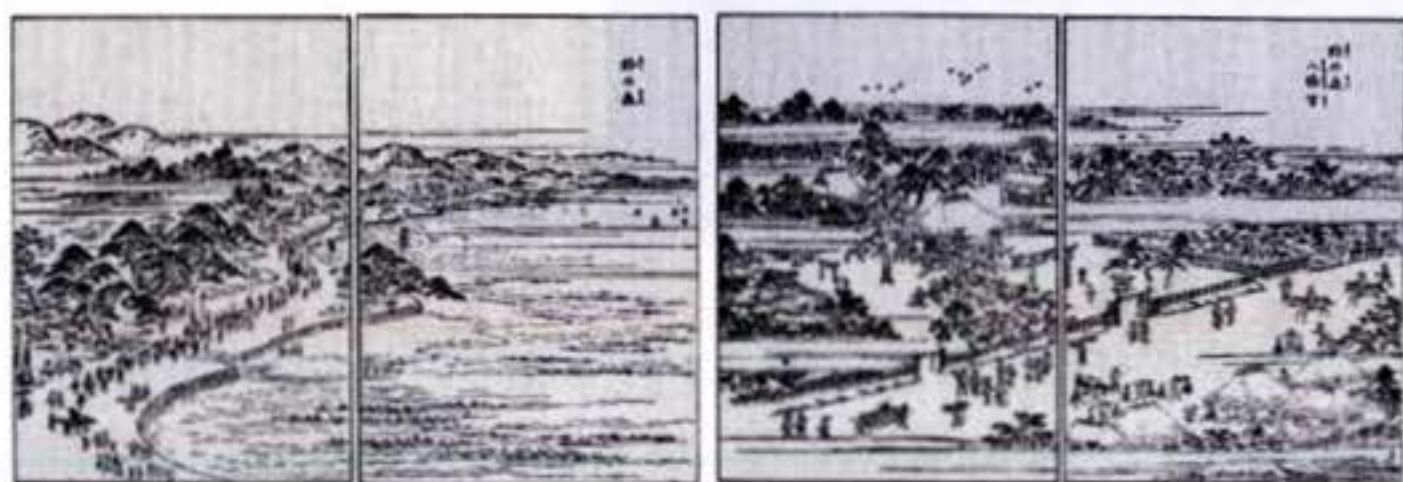
才（満十四才）。火事に被災し寺に避難。そこで知り合った若い僧に恋し、再び会えるならばと、火をつける。しかし、燃え上がる火

に怖くなり、自ら火の見櫓に登って半鐘を鳴らしたという。結果、ほやで済んだ。お七が極刑された理由の一つに、振り袖火事（明暦の大火、一六五七年、江戸の大半を焼く。この時、高さ十一メートルの石垣の上に建てられた、日本最大の江戸城天守閣も焼け落ち、二度と再建されることはなかった）に始まる度々の大火があり、江戸中が神経を尖らせていた経緯がある。だが、奉行も十六才になつたばかりの娘子を不憫に想い「お前はまだ十五才であろう」と言い含めた。十五才以下は罪一等を減じるという規定があつたのである。しかし、お七は自分の宮参りの記録を持ち出してまで正直に十六才であると主張したという。この話を井原西鶴が「好色五人女」で取り上げ、お七の名は知れ渡った。また、鶴屋南北は浄瑠璃、歌舞伎のシナリオに登場

させた。恋の相手の若い僧は、目黒行人坂下、明王院（雅叙園）の偉い坊さん、西運になった。お七の墓は駒込圓乗寺にある。

丸橋忠弥は武士で宝蔵院流槍術の道場を開き、由井正雪の片腕といわれた。そして正雪の幕府転覆計画に参加する。この計画が露見し、慶安四年八月十日（一六五二）鈴ヶ森で磔処刑。鈴ヶ森最初の処刑者とされている。河竹黙阿弥の「慶安太平記」に取り上げられ、初代左団次キセルの煙管の見得みえは庶民をうならせた。南品川宿、目黒川南側寺町一帯にある、妙蓮寺には丸橋忠弥の首塚と称される墓が立っている。寺町は妙国寺に至るまで二十あまりの寺が密着して存在していたが、妙蓮寺と本光寺の間を割って今、第一京浜が走る。南に向かつて妙蓮寺の角を右に曲がり、左に曲がると海蔵寺がある。これがいわゆる「投げ込み寺」で、品川遊郭の身寄りのない娼妓、品川牢で獄死した罪人、そして鈴ヶ森で処刑された罪人の首が埋葬された（首塚）。

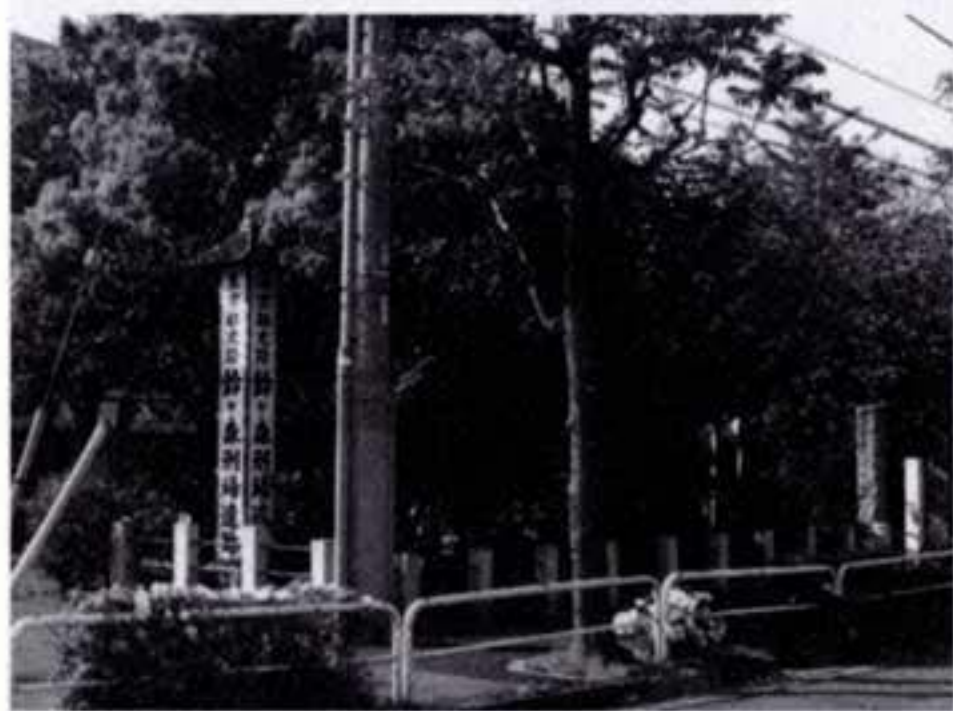
◆「江戸名所図会」上巻
鈴ヶ森神社



刑場から街道をさらに南に歩くと、鈴ヶ森八幡社（磐井神社）がある。現在は第一京浜に面しているが、江戸期には東海道に面し、門前は茫洋として広がる海であった。神社の歴史は古く延喜年間（九〇一―九二一）にはすでに存在していたようだ。神社一帯、背後には、松をはじめとする巨木の森があった。現在も門を入ると右手に樹齢四百年は十分にあると思われるイチヨウの大木が聳えている。門の正面に本殿。この神社には鈴石があった。この石を他の石で叩くと鈴の音がするというので江戸初期の頃にすでに庶民の間で一躍有名になった。「鈴ヶ森」地名の由来である。そして鳥石。鳥の形をした自然の文様が浮き出た石。双方とも現在は屋敷内に保管されている。街道を行く旅人の喉をうるおした磐井の井戸は、門前歩道の第一京浜寄りにあるが、江戸期には門内にあった。すなわち第一京浜の真ん中くらいまで、神社の敷地が広がっていたことの証左である。江戸庶民は

この水を飲み、志正しき者は真水で甘露と感じ、正しからざる者は塩味に顔をしかめたという。街道際まで海波に洗われていたのだから、この言い伝えは、存外真実であったのかも知れない。

◆鈴ヶ森刑場跡



◆磐井の井戸



連載

会いたい人 関 容子



山田
太一さん

1

撮影／タカオカ邦彦

名シナリオライターで小説家の山田太一さんに面識を得たのはまだ最近のことで、去年の秋、向田邦子さんを記念して催された立川談志、談春の会とき。向田家の招待客、作家、俳優、編集者などが会場のほぼ半数を占め、普段あまり寄席とは縁の薄そうなその客席の反応がズレる、と言つて、談春さんが困つていたのがおかしかった。

山田さんにはその日、女優の加藤治子さんから紹介していただいた。

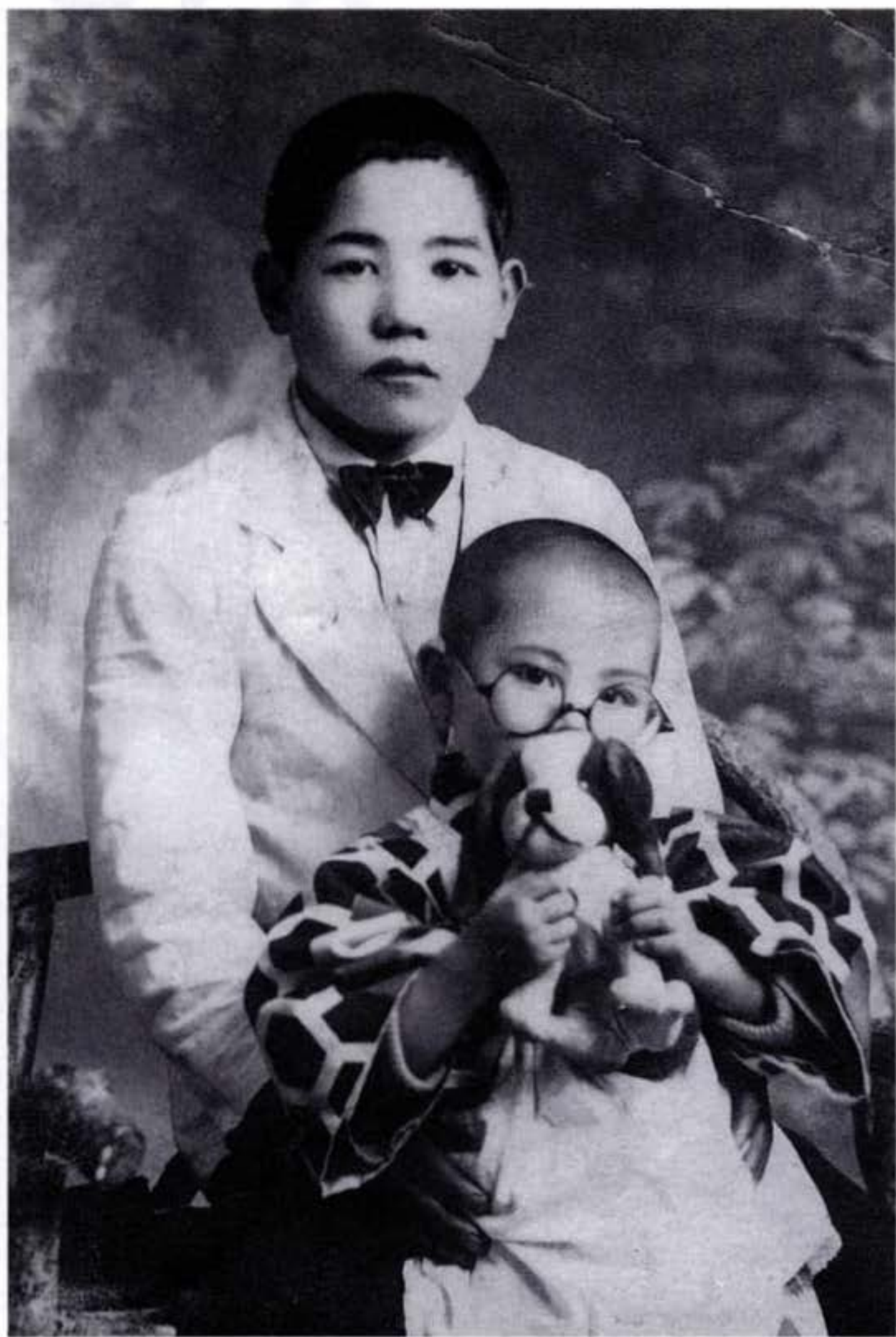
テレビドラマの不朽の名作とされる『岸辺のアルバム』『男たちの旅路』『シャツの店』や、映画『異人たちとの夏』とその原作（山本周五郎賞受賞の小説）などが好きだったので、かねがねお逢いしたいものと願つていました。とりわけ『異人たち』の主人公である中年の脚本家が、幼いころに死別した若い父親そっくりの男（異界の人）に出遭う場所が、浅草演芸ホールの客席、という設定が興味深かった。鳩バスの団体客がゴツソリ引揚げたあと

で高座の噺家がそれをぼやくと、「まだ鳩バスにいるよ」と客席から声を掛けてドツキリさせる職人ふうの男と彼に目を留める脚本家。映画では片岡鶴太郎と風間杜夫が演じて、しみじみさせられた。

山田さんの描く浅草がなぜそんなにリアルで心に沁みるのかと言えば、山田さんは浅草千束町の生まれで、私は隅田川を隔てた本所の生まれだし、山田さんの浅草が説明抜きで本物なのがよくわかるからだろう。

もう一つ浅草のつながりを言うと、生粋の浅草っ子女優の沢村貞子さんには生前何かと親しくさせていただいたが、あるとき沢村家の本棚にズラリと山田さんの本が並んでいるのを見て、やっぱり同郷のよしみで好きなんだなあ、と思つたものだった。

それからずいぶん時を経てしまったが、ようやく山田さんにお目にかかれて、まずは浅草のことから伺つてみた。



父が経営していた浅草の店のボーイさんの一人と。

「父が経営していたお店はかつての国際劇場（現在は浅草ビューホテル）すぐ近くの大衆食堂です。コロッケとかカツ丼とか、安くてたっぷりしたもののばかり。浅草のお客というのは、奉公に出てきて、たまの休みにお小遣い握りしめてくるような小僧さんとか、兵隊さんとか、軽演劇の人たちが幕間に扮装のままちよつと来て食べていくとか、気楽に入れる店でした。

父は愛知県の人で、まあ家出をして東京へ出てきて、屋台を借りて引っぱって支那ソバを売って、夜は公園のベンチで寝て、ようやく浅草までこぎつけて店を出したのが昭和三年。それで店の名前が三昭^{さんしょう}でした。三河の国の三も掛けてあるようですけどね。そこでは昭和九年に生まれました。八人兄弟の七番目。六男です。両親にお金も入ってきてもいい時期に生まれたわけです」

六男なのになぜ「太一」なのか、父の真意は聞きもらした、ということだ。それにして

も「小僧奉公」とか「支那ソバ」とか、同郷で同世代のせいかな率直な言葉遣いなのが嬉しい。

ところで戦前は若い人が結核で亡くなることがよくあったが、山田家でも長男、三男、五男をその病気で失くしている。

「三男の兄が病気になったとき、父が千葉県^{かいじん}の海神^{かいじん}というところに別荘を作ったんですよ。これ、別に鏡花なんか父が読んでたわけじゃないから、洒落じゃありませんよ（笑）。あのころ、浅草あたりである程度成功した人が千葉に別荘を持つ、というのが流行ったらしくて、演出家の木村光一さんのおうちも、両国だったのが千葉に別荘があったという話です」

そう言えば、私の本所の家にも市川国府台に別荘があり、長兄が肋膜炎の療養をしていた。

「ぼくには妹の子守がついて、別荘地の幼稚園に行かされたんですが、いい家庭の育ちの

疎開する前に最後の浅草で撮った記念写真。向かって左から時計回りに、母りん、姉房子、太一、妹直子



いい子がいっぱいいるからいい服を、という
んでよそいきの服を着せられたんです。でも
本当の金持ちというのは普通の恰好して来て
て、あまり着飾らない。それで自分の姿がと
っても恥ずかしかった。ものすごく心の傷に

なりましたね。

で、自分のある種の資質が形成されたな、
と思うのは、遊戯とかやってて前の男の子の
後ろ姿が見えたとき、半ズボンの腰のポケッ
トがほつれて少しめくれてたんですよ。ああ、

破れてても品のいい子はいんだなあ、と思
いましたね(笑)。ぼくは、父ちゃん母ちゃん
の世界で育ってますから、やだなあ、早く下
町へ帰りたい、と思いましたよ」

山田さんは、浅草の金龍小学校に入学する。

「もう、次男の兄が店のコック場の中心にな
って働いてましたから、夜、少し早めに父が
ぼくを連れて別荘へ行くことがあって、する
と途中の乗換え駅で降りて、駅前の屋台のお
でん屋で一杯飲む。ぼくも床几の端っこに腰
掛けて、のれんがこう頭にかぶる感じで、お
でん一串もらって食べながら外を見てると、
広い路が人通りもなくシンとしてて、暗い中
を野良犬が一匹歩いてる、という映像を憶え
てますね」

まさに山田太一ドラマの世界。

しかしその海神別荘は、ほどなく売り払わ
れることになる。病気の三男が亡くなったの
で、縁起が悪い、ということ。

「母も疎開先の湯河原で五十歳で亡くなりま

したが、元気なころ、子供はお店へくんじゃ
ないよ、って背を向けて、よく働いてました。
戦時中で、配給切符でビールを飲ませるんで
すが、行列のお客がもう一杯飲ませろ、って
ごねて、ダメと言ったら怒って母にビールを
掛けたんです。そしたら父が、お客さんちょ
っと、と言って裏へ連れてって、おい、と
コック場の人たち呼んで、袋叩きにした。そ
れ見ててぼくもミカンの皮ぶついたりして
(笑)。父も浅草の盛り場で生きてた人だから、
結構タフだったんですね。ちよつとそんなふ
うには見えなかったですけども」

昭和十九年、戦争が激しくなってお店に強
制疎開の命令が下った。

「空襲の類焼を避けるために強制的に家を間
曳^びくわけですね。夫婦でゼロから築き上げて
きた大事な店が根こそぎ取りこわされること
になって、その前に皿とか鍋とか店の物を安
く売ったりして、母には特にショックだった

と思います。まあ、うちがこわされたせいで、ぼくの勉強場のような六区の映画街や国際劇場が焼け残ったのかもしれないけどね。父は戦前湯河原にもよく遊びに行つてて、気に入つてみかん畑が買つてあつたんですね。まずそこに建ててあつた小屋に疎開をしました。で、土地の小学校へ通い始めたら、さすがに農家の子が多くて、長ズボン（ぼく、半ズボン）の腰に手拭下げて、そうずら、とかかなり訛る。先生が国語の本をぼくに読ませて、東京の人はこんなふうに読むもんだ、なんて手本にされたりね。ぼくは育ちが悪いと思つてたのに、疎開したらにわかには育ちがよくなつちやつた（笑）。でも少したつたら別荘人種がどつと疎開してきて、東京の子もそれほどのことではないことがわかつたし、ぼくも進んで方言を使つて土地の子と仲よくなつていましたね」

しばらくして山田さん一家は、温泉町に借家をして引き移つた。旅館には白衣の傷病兵

や集団疎開の児童が溢れ、敗戦も間近になる。

「借りた家は、元はカフェだったところで、ピンクのタイルの丸い柱があつたりする。母はこつちへ移つて一年足らず、終戦の年の一月に亡くなりました。癌でしたね。父が苦勞して買つてきた蜂蜜が唯一の栄養源だったんですが、ぼくが枕元を通るとき、母を見ないで蜂蜜のビンを見たと言つて、母が怒つてね。お前はそんなにこれが食べたいのか、つて。そんなことないよ、つて言つて、物干に上がつて泣いたことがありますよ。四年生くらいです。から無理ない、と思うんですけど」

昭和二十一年、山田さんのすぐ上の兄も結核で苦しみながら亡くなつた。

「五男の兄はぼくと年が離れてたんでプロペラを作る工場に徴用に取りられて通つた。あるときひどくなくられて帰つてきて、だんだんわかつてきたら、どうやら恋人ができて、土地の女を取つたというんで地元の男たちが寄つてたかつてなぐつたらしい。亡くなつた

とき、女の人 came したし、四十九日とかの区切りのときや、その後も何年かにわたって命日には必ずお線香上げにくる。父と姉が、あなたもお若いんだからどうかもうお忘れください、って言っていましたけど、昔の人は純情だったんですね」

その兄さんがいよいよ亡くなるという前の情景は、ドラマチックだ。

「裏手の二階の小部屋が病室で、姉が世話してたんですが、兄が家族の一人一人と話したい、と言ひ出したんです。近寄って話しちゃいけないとか、息するとか父に言われて、兄もそれわかってて、手短かにね。貯金の中からいくらかはお前に上げる、って金額を言うんですよ。それからお前が欲しがってた軍艦の図鑑。今でも欲しければ上げるよ、とかね。物価が上っててお金はいくらでもないし、戦争中の図鑑なんかもういらなかったけど、でも、有難う、って別れて。みんな病室から戻ってくると泣いてね。悲しかったです

けど、間もなく兄は亡くなりました。そういうのって、なんとなくぼくの原点にありますね」

土地の娘がいつまでも忘れられないでいるほど、その兄さんは心優しく、きれいな若者だったのだろう。でも、親兄弟一人一人と別れを告げるという、普通考えつかないような場面を、山田さんは既に何かに使っているのだろうか。

「いえ、使ってません。ぼくは自分の回りのことはほとんど使わないんです。ほんとのことをそのまんま書くというのでは小説を書く甲斐がない。嘘の話だからほんとのことが書ける、踏み込めるってことですからね。ああ、でも、もうお線香上げに来ないでください、って女の人に言う話は、短篇のドラマで昔書いたことがありましたね」

(つづく)

恒河沙数の諸仏、各おのその国において、広長の舌相を出だして三千大千世界を覆いて、誠実の言を説きたまう。汝等衆生、まさにこの称讃不可思議功德一切諸仏所護念經を信ずべし。〔阿弥陀經〕

〔あらゆる世界に〕ガンジスの河辺の砂の数ほどの無数の諸仏がましまして、それぞれがそれぞれの世界で、口から仏の証である長く長い舌を出し、その舌であまねく三千大千の世界を覆って嘘偽りのないことを示して、次のような真実に満ちた言葉を述べられる。「汝ら、諸人よ。この『阿弥陀仏の』人知をはるかに超える功德についての称讃』または『あらゆる仏が常に心にかけてお護りくださる』という名の法門を信ぜよ」と。

ダイジョウブ、ダイジョウブだから

信州信濃の善光寺は創建以来千四百年の歴史を刻み、その間、何度も建て直されてきたが、今年平成十九年には、現本堂が再建されてから三百年という節目の年を迎えたという。現本堂は国宝でもあり、また善光寺一帯が世界遺産への登録を目指していることもあってか、この節目の年を盛り上げようと、年明けから記念行事が次々と催されている。

二月二十一日、その口火を切って善光寺大本願雅楽会による演奏が善光寺本堂内陣で奉納された。私は雅楽会の一員として龍笛（横笛）りゅうてきを担当。雅楽はどの曲も笛一管によるソロフレーズから始まることになっているが、当日、私はその任を託されることになった。

東日本最大級の木造伽藍である善光寺本堂の内部は、天井が恐ろしく高く、奥行きもかなり長い。楽器を奏できれば気持ちいいほどに反響するのだが、高さと奥行きがある分、音の帰りが遅いという特徴がある。ほんの0.1秒でも何秒の感覚的なズレなのだけでも、自分が出した音を自分の耳で確認できるまで時間差が生じてしまうのである。

しかも笛の音は、その周波数の特質によるのだろうが、笙・篳篥しょう ひちりきといった雅楽の楽器の中でも、一番遠くまで音が行き渡る。ということは、善光寺のよう

な巨大な建物の内部で吹いた場合、自分の音が自分の耳に帰ってくるまで一番時間がかかってしまうのが笛なのである。

じつは善光寺本堂での演奏は、私自身、二回目の経験となる。一回目は一九九八年の冬季オリンピック長野大会直後のこと。その時も笛のソロパートを受け持ったが、悩まされたのは音の帰りの遅さであった。

自分では十分な音量を出しているつもりなのに、音の帰りが遅い分、自分の音が確認できない。確認できないから自信が持てず不安になる。不安になるから無意識のうちに強く息を出す。力んだ結果、余裕で吹けるはずのフレーズに息が足らなくなり、自分のペースを見失ってしまったのである。

今回は事前に音出しをさせていただいた。雅楽会の仲間に本堂の隅々に立つてもらい、どの程度の息の強さで、どの程度音が響くか確認してもらったのである。随分と軽めに吹いたつもりでも、笛の音は十分に響いていたそうである。

迎えた本番当日、軽めに吹くことを意識した。「ちゃんと響いている、ダイジョウブだから」と自分に言い聞かせつつ、何とかソロフレーズを吹き終えた。浄土宗の教えによれば、南無阿弥陀仏と称えれば、西方極楽浄土への往生が叶うという。もちろん、心の底から阿弥陀仏の救いを信ずるということが前提

となる。その点、たとえば『阿弥陀経』は「一心不乱」にお念仏を称え続けよ、されば往生が叶うと説き明かす。

でも「一心不乱」って、はたしてどのような心持ちなのだろうか。我々にとって往生は死ぬとき一度切りのこと。生きてるうちには確認できない。確認できない分、不安もよぎる。それでも信じたいから無闇に力む。でも、それで息切れしてしまつては元も子もない。釈尊は「一心不乱」と説く。が、その一方で東・南・西・北・下・上のあらゆる世界のみ仏お一人お一人が「阿弥陀仏の救いと念仏往生を願う衆生を諸仏が護念することを説くこの経を信ぜよ」とこぞって本心（誠実の言葉）を明かされると説く。「諸仏の証誠^{しょうじょう}」である。

「釈尊一人だけではない、あらゆるみ仏が念仏往生の教えは真実であると証明しよう、だから安心して信じよ」との御心の現れが諸仏の証誠とされるが、演奏会の晩を境に、「一心不乱といえども肩の力は抜いてていいんだよ。ダイジョウブ、ダイジョウブなんだから」という励ましに思えてきたのである。

一心不乱だけでも力まない。念仏を称え続けるには案外重要なことではないだろうか。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

墓参に来たのは三十歳前後の青年だった。

「どちらへお参りですか」

「鈴木のおバアチャンの所へ」

「そうですか。でも今日はご命日ではないですね」

「近くに来たものですから」

「どうしてその気になったのですか。近くに来ることは幾度もあったでしょうに。今日に限って」

「どうしてだか分かりませんが、足が向いてしまいました」

「貴方の手を引いてよくお参りになりました。優しいおバアチャンでしたね。何時もニコニコして」

「よく可愛がってくれました。亡くなってもう五年になります」

「なぜ足が向いたのでしょうか。不思議

だと思いませんか」

「もしかするとおバアチャンが呼んだんでしょいか」

「そうかも知れませんが。どうしてるか、お前に会いたいよ、という心が貴方に通じたのかも」

「だとすると、亡くなった後も、あの世とこの世と離れていても心は繋がっているんですかね……」

「お念仏しておバアチャン来たよ、と元気な姿を見せてあげなさい。喜ぶお顔が目に見えよう」

「有り難うございました。いいお話しを伺いました」

ニコリ微笑んだ顔があとに残った。

法然上人鑽仰会

公開講演会のお知らせ

講師
田島 栄

念仏はひとつ
念仏の声いまに

法然と親鸞

日時	平成19年6月29日（金曜日） 午後3時より4時半まで
会場	大本山増上寺慈雲閣 東京都港区芝公園4-7-4 地下鉄都営三田線「芝公園」徒歩2分 地下鉄都営浅草線・大江戸線「大門」徒歩7分 JR「浜松町」徒歩10分
会費	会員 無料 一般 千円
申し込み	会員、一般ともに不要(先着150名)
主催	法然上人鑽仰会
後援	浄土宗総合研究所

本年7月14日～31日、京都・四条・南座を皮切りに、名古屋、大阪、東京でも上演予定の、法然上人800回忌、親鸞聖人750回忌を記念した、前進座特別公演「法然と親鸞」の脚本を書かれた、田島栄先生にお越し頂き、田島先生の法然上人、親鸞聖人への思いを語って戴きます。

舞台を拝見する前に是非、お聴き戴きたいと思います。

問い合わせ先
法然上人鑽仰会

105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

電話：03-3578-6947 ファクス：03-3578-7036

浄土誌上句会

●奥

〔特選〕奥多摩のはなびら薄き桜かな

狭山 棹

この句を読んで、川合玉堂の桜の屏風を思い浮かべた。奥多摩はハイキングや登山者に格好の地である。この桜は染井吉野のような安っぽいものではなからう。「はなびら薄き」がいかにもやさしくてよい。

〔佳作〕開け放つ艇庫の奥へ春の風

浜口 佳春

朝桜奥の院までまだ遠き

増田 信子

葦芽吹く入江の奥の日溜まりに

石原 新

●鈴

〔特選〕熊除けの鈴音響く芽吹きかな

袴田 阿形

この頃民家に近く、猿や熊が出没するようになった。これも人間のせいで、それで人間が困っているのである。「芽吹き」とあるか

ら、熊は冬眠から覚める頃である。鈴を大きく鳴らしながら行くのが聞こえてくる。

〔佳作〕御和讃の鈴流れゆく御忌の空

河合富美枝

旅帰り納屋の馬鈴薯芽を吹けり

山口 信子

峡の田の水やわらかし鈴蛙

井村 善也

●自由題

〔特選〕窓洩るる老いのカラオケ春近し

東 保

私の町には老人憩いの家というのがあって、何人もがカラオケを歌いに行くという。この句もそういうのだろうか。新しい曲から自分の若かった頃のものまで取り混ぜてである。この頃の年寄りは元気だ。

〔佳作〕遅き日の墓地にのびきる猫の胴

青山 亜子

花散らす雨音のしてひとりなり

鈴木真理子

別れ霜真白に置きし瀬戸田かな

一丁目美恵

遊半自由題

兼題
(季語ではありません)

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇〇七年六月二十日

発表・『浄土』二〇〇七年十月号

選者・増田河郎子 (『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

奥

逞しき笹敷奥の路の臺

工藤 浄真

風かほる抽斗奥の亡母の櫛

中島富士子

山奥の緑の中につつじあり

金谷 友江

姥一人雛を飾りて奥座敷

河合富美枝

胸奥の掃く術もなき落椿

片桐てい女

ひとひらの桜は靴の奥にあり

千田 敏郎

奥の間に止まったままのかざくるま

山口 東人

鈴

鈴生りの夢一杯に馬鈴薯植う

工藤 浄真

病む夫の吾呼ぶ土鈴明易し

中島富士子

鈴と鈴響かふ御忌の和讃かな

金谷 友江

御和讃の鈴流れゆく御忌の空

河合富美枝

陽炎や湖一周の馬車の鈴

片桐てい女

寒行や新雪踏みて鈴の音

飯島 英徳

仏壇の鈴の座蒲団春寒し

和田 仁

老いて母鈴鳴るやうにして来たり

浜野 振子

自由題

新寺建つ木の薫り満ち佛あり

飯島 英徳

路の臺ほろにがかりし常の世は

工藤 浄真

摘草や野に溶けさうな人の影

中島富士子

木の芽張る向き矯正の道路鏡

片桐てい女

露座仏の御手にきらり薄氷

河合富美枝

八十路きて花の通路となりけり

金谷 友江

春めける人声すぐに風に乗り

寺下 忠至

播く前に振りて音聞く種袋

中村 真一

地虫出ず翅あるものの光りとぶ

吉崎美和子

友も来てわけぎ揃える畑の畔

浦田 ちゑ

葉桜や過ぎゆくものはやはらかし

十条 苑を

葉桜の葉が好きといふ人が好き

浜野 振子

花散りし土の校庭木の校舎

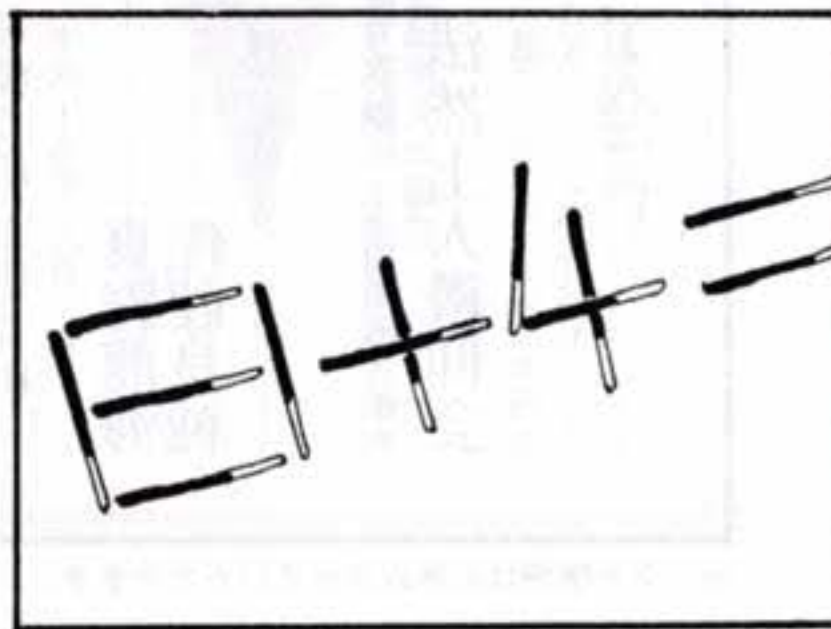
和田 仁

さっちゃんはネッ

41

かい

かまち♡ひろう



編集後記

古刹にもびっしりとした青梅の木 岱潤

友人と作っている「ふじゅせん刊行会」という会で、最近通夜・葬儀用の経本を出版した。お陰様で大変好評で既刊本を買って戴いているお寺から連日のように注文が殺到している。

そして、出版物に付き物の校正ミスというものが、悲しいかな今回も上梓されてからわかった。細かな箇所でいろいろ意見もあったのだが、出版物が経本であるということもあり、正誤表を入れることにした。すると次のような言葉があるお寺から振り込み用紙に記載されてきた。「それにしても間違いが多過ぎる。どうして繰り返し繰り返し校正しなかった。」

たのですか、念には念を入れよ。です。間違い多いと商品として値打ちが半減する」。

友人からは、「正誤表を入れたからだよ」といわれる。確かに発行元に権威があると、正誤表は入れない事が多い。しかし我々のような会、権威など有るはずがない。正誤表を入れるのは誠意以外何者でもない。校正ミスのない初版本などこの世にはないのが常識の中で、これが発行者側の論理なのだが、本など出したことのない方には、全くわからないことかも知れない。

それにしてもこうした傲慢なことを平気で名乗りながら言える厚顔な僧侶がいることは、残念でならない。

(長)

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十三巻六月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第二種郵便物認可

印刷 平成十九年 五月二十日

発行 平成十九年 六月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

※シネマ随想はお休みさせていただきます。

連載

教えと法話

一時來會

いち

じ

らい

え

ある時、来りて会う

無量寿經

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

生野善應

出会いは、
心の糸が
しつかり結ばれていること。

出会いは、人と人が顔を合わせるだけのもの
ではありません。毎朝、病室を回って「おはよう
ございます」という若い看護婦さんの挨拶は、患
者さんに生きる喜び与えるエネルギー源、「できる
じゃないか」と英語の先生に言われた中学生が英
語大好き少年になったり、「君きれいだよ」と恋人

や夫に言われた若い女性がすてきな大和撫子にな
るのは、自他を合して一核となった、血の通った
人間関係ができあがっているのです。

親子、夫婦、師弟、友人は、縁によるかけがえ
のない出会ひ。非力な私たち、寂しがり屋の私た
ち手を取り合って、仲良くしましょう。

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47 × 59cm



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『差出人は法然さん』
600円

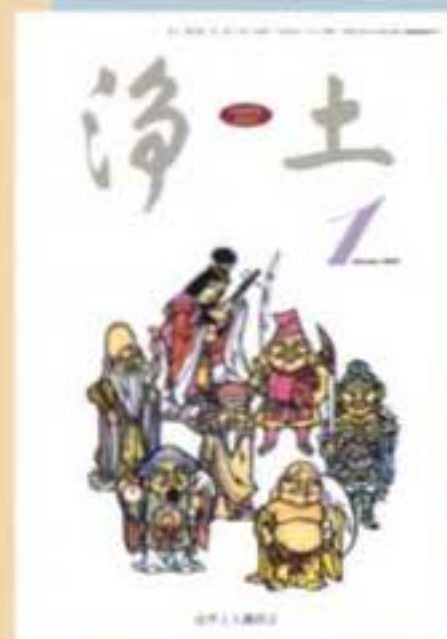
選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



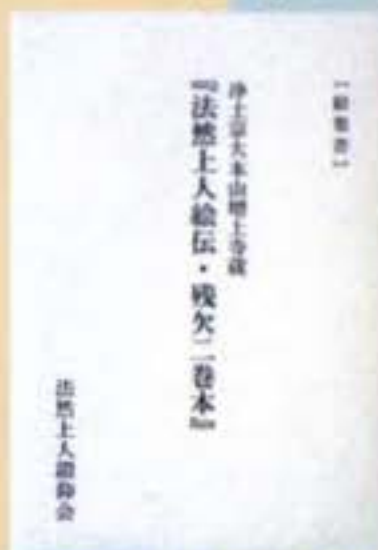
『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036